

II 平城京・京内寺院の調査

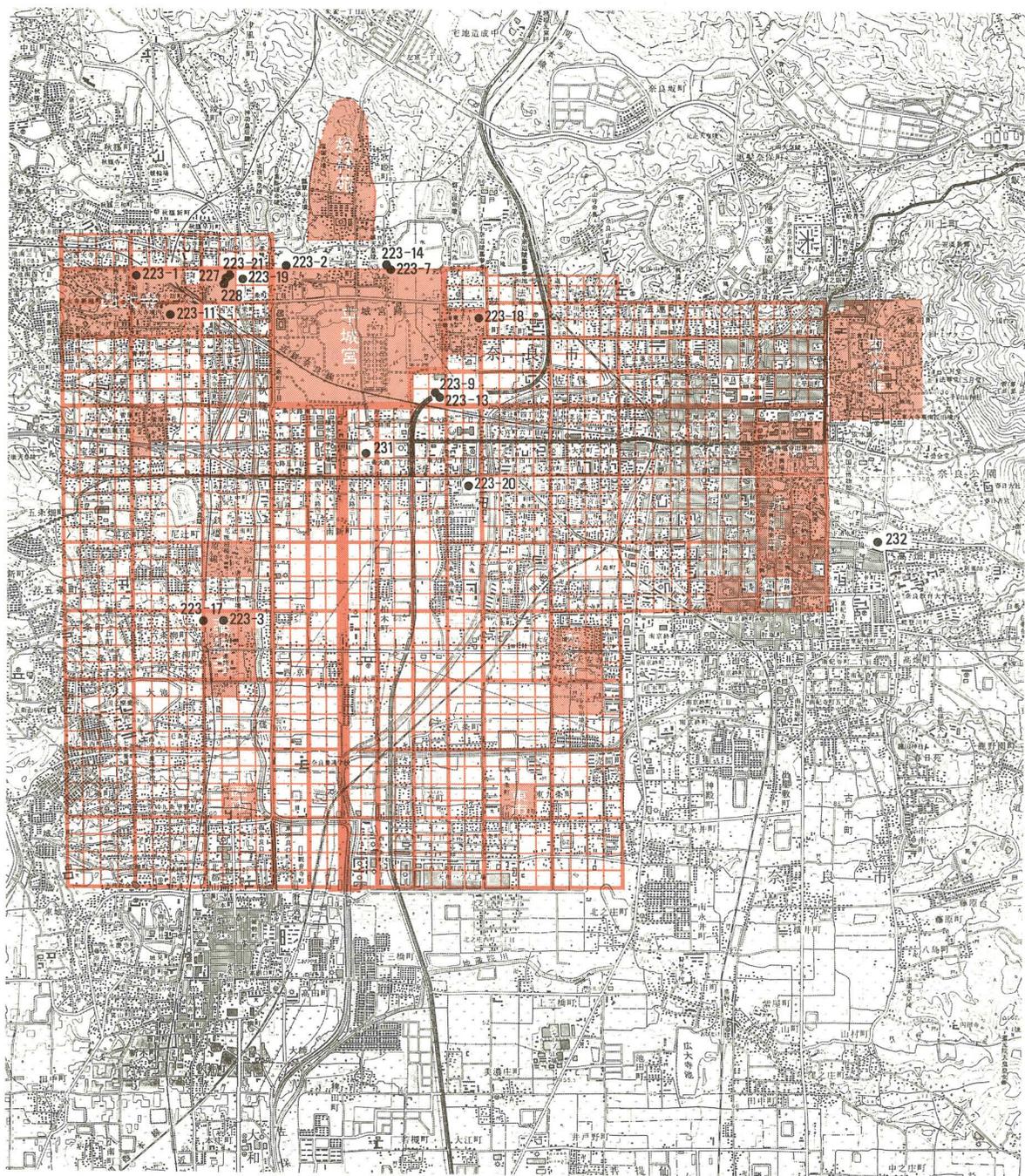


図32 1991年度平城京・京内寺院調査位置図 (1/25000)

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考
227	西隆寺旧境内	6 B S R, 6 A G R	500	7. 1～ 7. 31	玉田 芳英	奈良市都市計画道路
228	西隆寺旧境内	6 B S R	700	10.18～11. 7	森本 晋 松本 修自	奈良市都市計画道路
231	左京三条一坊七坪	6 A F J	2,600	1. 8～ 3. 31	杉山 洋	積水美術館
232	頭塔	6 B Z T	15	2.15～ 4. 15	高瀬 要一	奈良県整備
223- 1	西大寺旧境内	6 B S D	110	4. 9～ 4. 15	本中 真	永井宏昌宅
223- 2	宮北方	6 A S A	30	4.23～ 4. 28	館野 和巳	城本幸一宅
223- 3	薬師寺宝積院	6 B Y S	200	5.23～ 6. 29	毛利光俊彦	塔頭施設
* 223- 4	右京北辺二坊	6 A G R	56	6.13～ 6. 14	島田 敏男	奈良市都市 計画道路(地山確認)
* 223- 5	右京三条一坊十坪	6 A G F	7	6.18	島田 敏男	中川寿夫(中世沼)
* 223- 6	宮北方	6 A S A	48	7. 1～ 7. 3	森本 晋	山中茂宅(地山確認)
* 223- 8	宮北方	6 A S A	15	7.29～ 7. 30	上野 邦一	米沢アキ子宅(地山確認)
223- 9	東院南方遺跡	6 A F F	80	8. 6～ 9. 5	小沢 毅	小川又次宅
223-11	西大寺境内	6 B S D	472	9.17～10. 7	金子 裕之	新塔予定地
* 223-12	宮北方	6 A S B	3	10. 3	巽 淳一郎	奈良市下水道(地山確認)
223-13	左京二条二坊	6 A F F	80	10. 7～10.16	寺崎 保広	岸本設計
223-14	市庭古墳東辺	6 A A N	8	10.22～10.22	金子 裕之	宮前義夫宅
* 223-15	宮北方	6 A S A	6	11. 7	巽 淳一郎	藤田裕太郎宅(近世沼)
223-17	薬師寺西面大垣	6 B Y S	270	11.20～12. 5	寺崎 保広	墨運堂
223-18	海龍王寺旧境内	6 B K A	60	12. 6～12.20	松本 修自	塚本忠一宅
223-19	右京一条二坊八坪	6 A G A	200	12. 9～12.18	金子 裕之	西里ビル
223-20	田村第推定地	6 A F M	425	1.10～ 2.22	渡辺 晃宏	大橋ビル
223-21	西隆寺旧境内	6 B S R	236	1. 6～ 2. 6	浅川 滋男	奈良市都市計画道路

表7 1991年度平城京・京内寺院発掘調査一覧 (*は未収録)

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考
225	法隆寺境内	6 B H U	600	4. 2～ 6.28	小沢 毅他	若草伽藍跡
226	法隆寺境内	6 B H R	2,800	6.11～	島田敏男他	百済観音堂

表8 1991年度法隆寺発掘調査一覧

6 東院南方遺跡の調査 第223-9次

1 はじめに

駐車場の造成に伴い、左京二条二坊五坪の北端付近で、事前の発掘調査を実施した。調査地は東院南方遺跡にあたるが、この周辺は、近年のデパート建設および駐車場造成など、開発と調査の進展が著しい地域である。今回の調査区の北東の隣接地においても、1989年に第202-9次調査を行っている（注1）。

調査にさいしては、重機で耕土・床土を除去したが、その直下において奈良時代の遺構を検出したので、以下は人力掘削によった。遺構面は3面におよび、いずれも奈良時代である。そのため、逐次各遺構面における精査と遺構掘削を繰り返すこととなった。平城京の宅地としては、遺構を層位的に把握し、調査しえたという点で、稀有な例に属する。

2 遺 構

調査区の基本的な層序は、水田耕土・床土の下に多量の遺物を含む厚さ5～15cmの灰褐色砂質土（遺物包含層）があり、その下に第1～第3遺構面がある。第

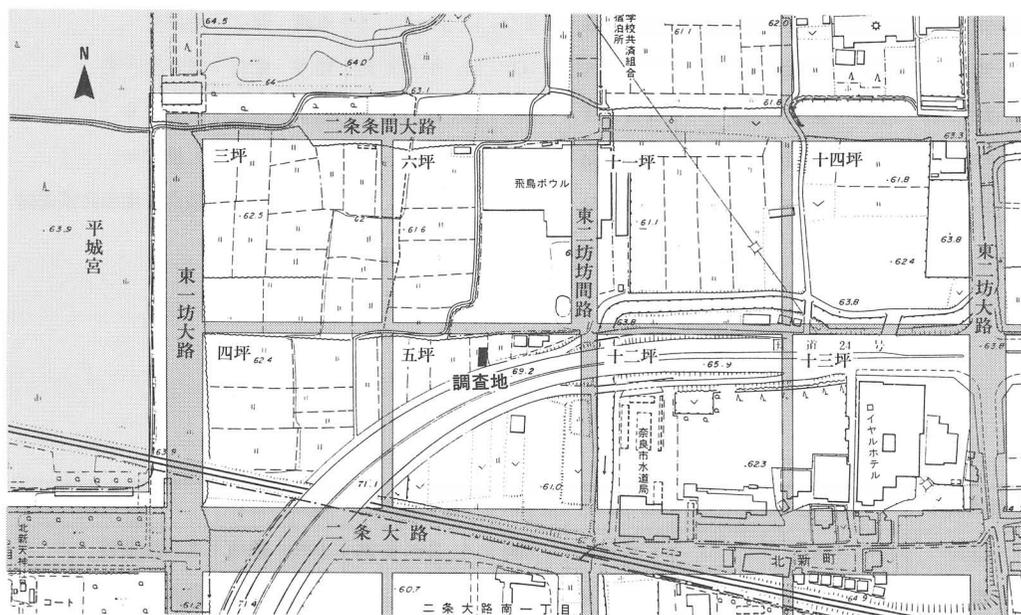


図33 第223-9次調査位置図 (1/5000)

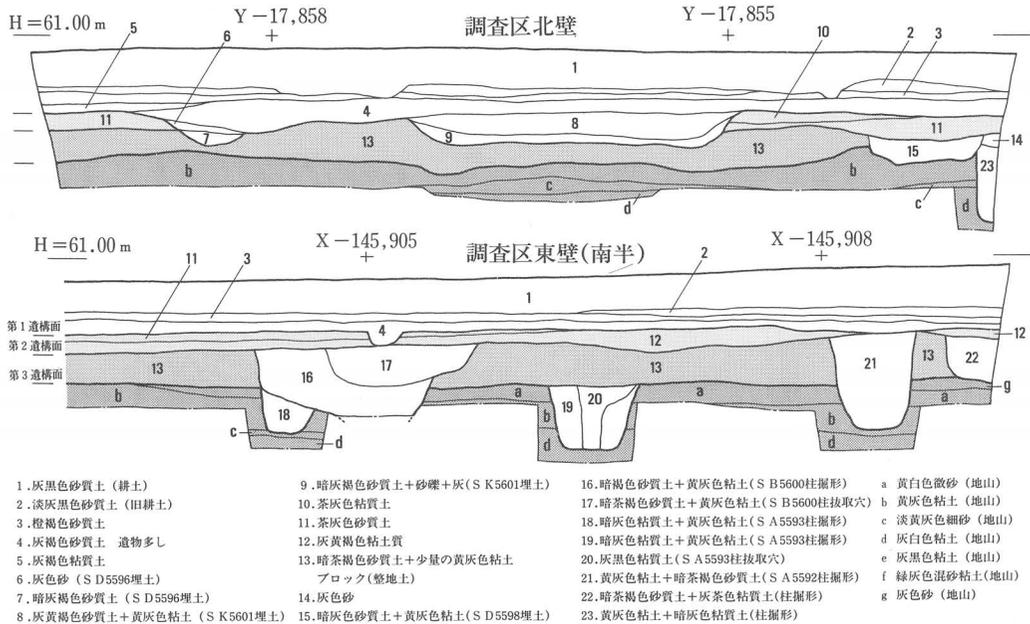


図34 第223-9次調査二分土層図(1/50)

3遺構面は、灰白～黄白色微砂ないし黄灰色粘土の地山面である。この上には、少量の黄灰色粘土ブロックを含む厚さ20cm前後の暗茶褐色砂質土(整地土)が置かれる。その上面が第2遺構面である。柱掘形には、第2遺構面と第3遺構面からそれぞれ掘り込まれたものがあり、層位的に区別することができる。第2遺構面の上には、あわせて厚さ10cm内外の茶灰色砂質土・茶灰色粘質土・灰黄褐色粘質土が認められるが、いずれも調査区全体には及ばない。数層に分れることと、この上面(第1遺構面)における遺構が稀薄であることを勘案すれば、造営にかかわる整地土ではない可能性が高い。遺構面の標高は、第1遺構面が約60.5m、第2遺構面が約60.35m、第3遺構面(地山面)が60.15m前後である。

SB5600 調査区南部で検出した、一辺1.5mにおよぶ大型の柱掘形をもつ建物。坪の中軸線上に位置する。柱間は10尺等間で、東西・南北とも2間以上であるが、西南の柱掘形は他に比べて小振りで浅い。そこでこれを妻柱とみて、坪の中軸線を軸に折り返した3×2間の東西棟を想定しておく。柱は全て抜き取られており、いずれの抜取穴の中にも、塼や平瓦が遺棄されていた。なお断ち割りを行った

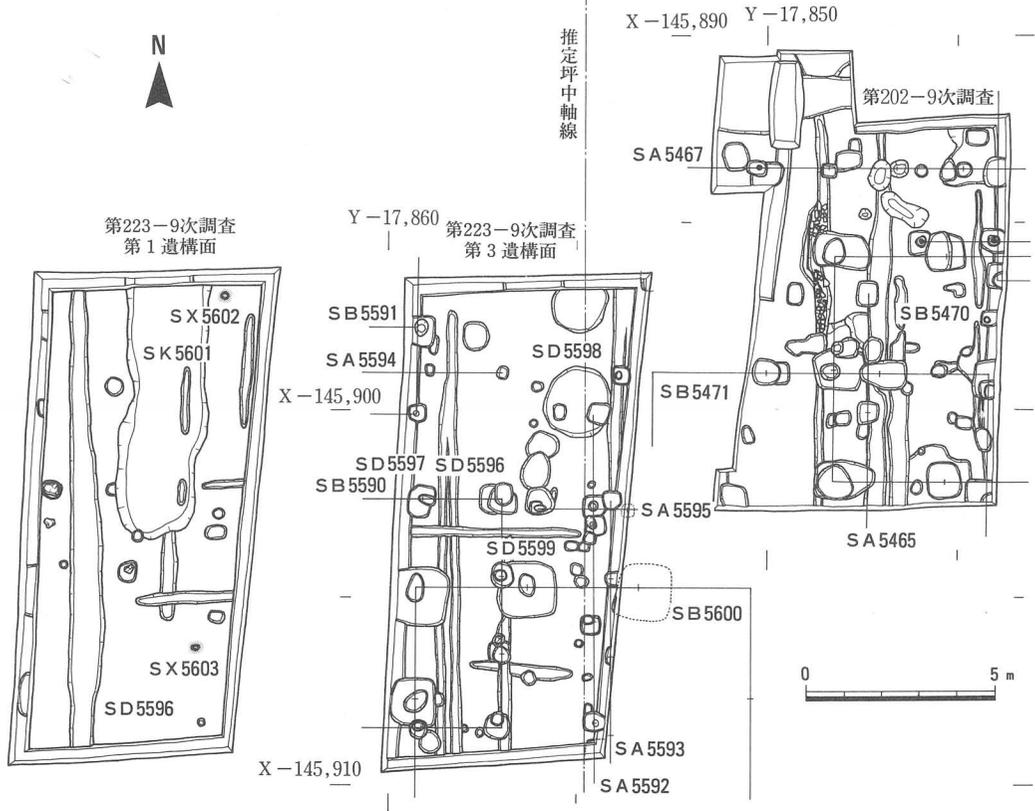
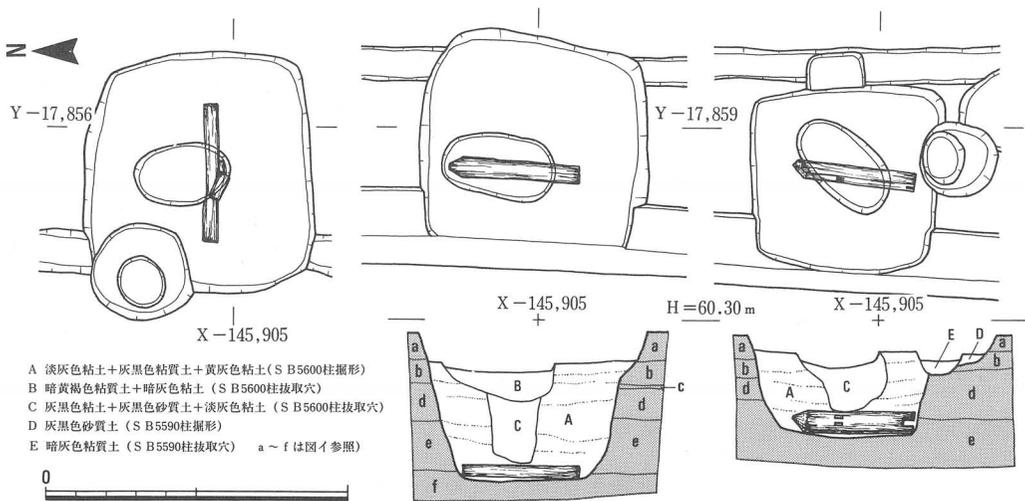


図35 第223-9次調査遺構図(1/200)



- A 淡灰色粘土+灰黑色粘質土+黄灰色粘土 (S B5600柱掘形)
- B 暗黄褐色粘質土+暗灰色粘土 (S B5600柱拔取穴)
- C 灰黑色粘土+灰黑色砂質土+淡灰色粘土 (S B5600柱拔取穴)
- D 灰黑色砂質土 (S B5590柱掘形)
- E 暗灰色粘質土 (S B5590柱拔取穴) a ~ f は図イ参照)

図36 SB5600柱穴・礎板実測図(1/50)

3柱穴においては、いずれも角材（転用材）の礎板の使用を確認した。柱径も大きく、抜取穴下部の収束状況から推定される直径は30cmに近い。柱掘形・抜取穴ともに第2遺構面から掘りこまれている。

SB5590 西南部で検出した南北3間の建物。東西は1間のみの検出であるが、3×2間の南北棟であろう。柱間は7尺等間である。柱は全て抜き取られている。柱径約24cm。柱掘形は第2遺構面から掘られており、SB5600を切る。

SB5591 西北部の東西棟建物。身舎東南隅の柱とそれに対応する南廂の柱を検出した。廂の出は8尺である。身舎柱は抜き取られており、柱径は24cm前後である。廂柱の径は14cm前後。第3遺構面から掘り込まれている。

SA5592 東壁沿いで検出した南北方向の柱列。3間分を確認した。柱間は9尺等間、柱径は約17cmである。建物となる可能性もあるが、北東に隣接する第202-9次調査区では対応する柱が認められない。坪のほぼ中軸線の位置に該当することとあわせて、坪を東西に2分する塀と考えるのが妥当だろう。第2遺構面の遺構。

SA5593 SA5592の東を並行する南北方向の柱列。同様の理由から塀と考えておく。第3遺構面の遺構で、SA5592に先行する類似の施設であろう。2間分を確認した。柱間は7尺等間である。SB5600の柱掘形によって切られる。

SA5594 西北部で検出した東西方向の柱列。柱間は7尺で、柱位置がSB5590と対応することから、それと関係するものであろう。第2遺構面の遺構。

SA5595 中央部東寄りで検出した東西塀。東側の柱穴は東壁にかかる。柱間は8尺で、ちょうど中軸線をまたぐ形で設けられている。第2遺構面の遺構。

SD5596 西壁沿いの南北溝。第1遺構面から掘りこまれている。

SD5597 SD5596の西側の南北溝。SB5600の柱掘形により切られる。第3遺構面。

SD5598 東北部で検出した南北溝で、SA5593より新しい。第2遺構面の遺構。

SD5599 中央部で検出した東西溝。第2遺構面の遺構である。SB5600の北側柱列の北1.5m（5尺）を並行しており、雨落溝と考えられる。

SK5601 北半の中央にある土坑。南北7.1m以上、東西2.2mの規模を有する。深さは20～25cmである。第1遺構面から掘り込まれており、埋土は大きく上層・下

層に分れる。下層からは木炭を交えて多量の須恵器・土師器が出土した。

SX5602・SX5603 東北および東南部で検出した焼け穴。径13~20cmのくぼみに多量の木炭が詰まる。検出面からの深さは4cmである。周囲には径30~40cmにわたり、火熱による赤変が認められる。第1遺構面の遺構であるが、時期は不明。

遺構変遷 奈良時代の初頭に溯る遺構は、第3遺構面から掘り込まれたSB5591およびSA5593とSD5597であろう。SA5593は坪の中軸線にほぼ合致するが、坪を東西の宅地に分割する施設ではなく、宅地内の区画施設と考えておきたい。

層位や重複関係の上から、これらに後続する時期と想定されるのが、第2遺構面のSB5600・SD5599である。柱位置は対応しないが、SA5595も併存を想定しうる。中軸線上に位置する点から、少なくとも坪の東西に関しては一体として使用されたことが確実である。1町またはそれ以上の宅地であろう。大がかりな整地を行ったうえに造営されており、前代にくらべて大規模な区画の改変があったことは間違いない。廃絶年代については、SA5595の柱抜取穴から曲線顎Ⅱの軒平瓦6663Cが出土したことから、奈良時代後半とみられる。

これらに後出するのがSB5590・SA5594であり、SA5592・SD5598もこの時期におくことができる。いずれも第2遺構面の遺構で、層位的には前代のものと区別できない。中軸線上の建物は廃されて塀に変わり、奈良時代初頭と近い様相を示す。SB5590・SA5594を切る土坑SK5601とSD5596は、第1遺構面から掘り込まれ

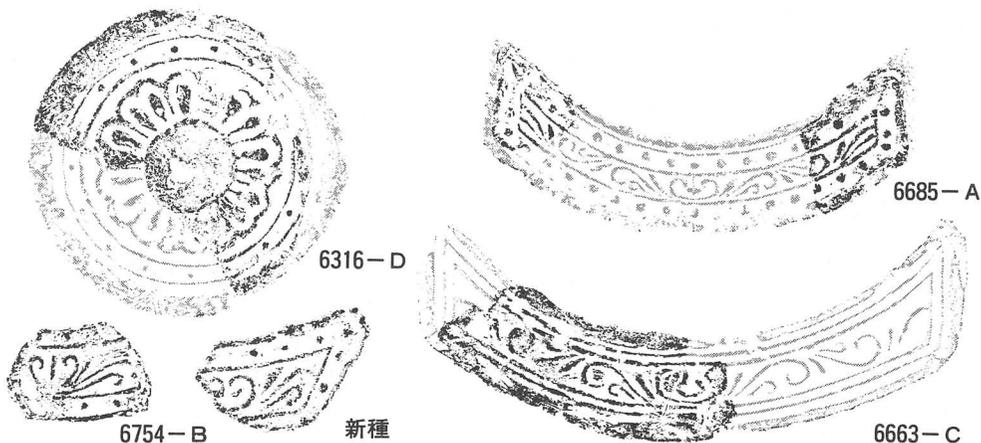


図37 第223-9次調査出土軒瓦(1/4)

ているが、奈良時代の末に属するものであろう。なお、この他にまとまりをつかみえない柱穴がいくつかあり、時期区分の数はさらにふえる可能性が高い。

3 遺物

奈良時代の遺物がほとんどで、包含層およびSK5601からの出土が多い。軒丸瓦は6316Dが2点、軒平瓦は6663C 1点、6685A 2点、6754B（新種）1点のほか、型式不明の新種1点がある。丸瓦319点25.1kg・平瓦1143点115.2kgと、軒瓦以外の出土量も多く、また埴が22点（33.3kg）出土しているのが目を引く。瓦の数量が多いのは、調査区のすぐ北側に想定される門や築地との関係によるものであろう。須恵器・土師器は、あわせて5箱が出土している。

4 左京二条二坊五坪周囲の条坊復原

今回調査した五坪は、南が二条大路、北が二条条間南小路に面し、西を東二坊坊間西小路、東を東二坊坊間路によって画される。これらの条坊道路は、いずれも過去に発掘調査が行われており、その成果から当該坪の四至を復元しておきたい。同時に、作業の過程で生じた問題点についても述べることとする。

二条大路 二条大路については、平城宮南面大垣から70大尺（84尺）南に条坊計画線があり、その35大尺（42尺）北に北側溝心、70大尺南に南側溝心が置かれたことが明らかにされている（注2）。つまり条坊計画線は、側溝心々間距離を北から1：2に内分する位置にあたる。当該坪の南においても、南北両側溝（Ⅰ・Ⅱ）を検出しているが、北側溝は数回にわたる改修が行われており、複雑な様相を示す。そのため当初の北側溝心については確定しがたい部分があるが、側溝心々間距離でほぼ38.25mと計測することができる。これは壬生門付近の道路遺構から復元された37.31m（105大尺＝126尺）にくらべると若干大きい。側溝幅が狭くとられていることに関連すると考えられるが、この点については後述する。

二条大路の条坊計画線は、この距離を北から1：2に内分する点（ロ）と、朱雀大路路心の延長線上で、朱雀門心（X＝145,994.49、Y＝18,586.31）から70大尺（24.86m）南の点（イ）とを結んだ線に求めることができる。国土座標系に対する振れは、7' 01" である。

東二坊坊間西小路 調査地の南方で検出例がある。長屋王邸のあった左京三条二坊では、幅員（20大尺）とともに路心（Ⅲ）の位置が明らかになっており、六条二坊の場合も、西側溝心（Ⅳ）の東10大尺（3.55m）の位置に路心（ハ）を推定しておく。両者を結ぶ直線の振れは、17' 24" である。これとイーロの交点、つまり二条大路と東二坊坊間西小路の条坊計画線の交点をAとする。

二条条間南小路 調査地の東方の第156-18次調査と第215-1次調査で、北側溝が確認されている（Ⅴ・Ⅵ）。ところが、後者の基準点測量に際して、前者の基準点を使用した第164-12次調査の基準点を再測した結果、X座標に大きな差違が認められることが明らかとなった。したがって、Ⅴの座標値の正否については問題がある。一方、後者において復元された路心（ニ）も、二条大路条坊計画線に

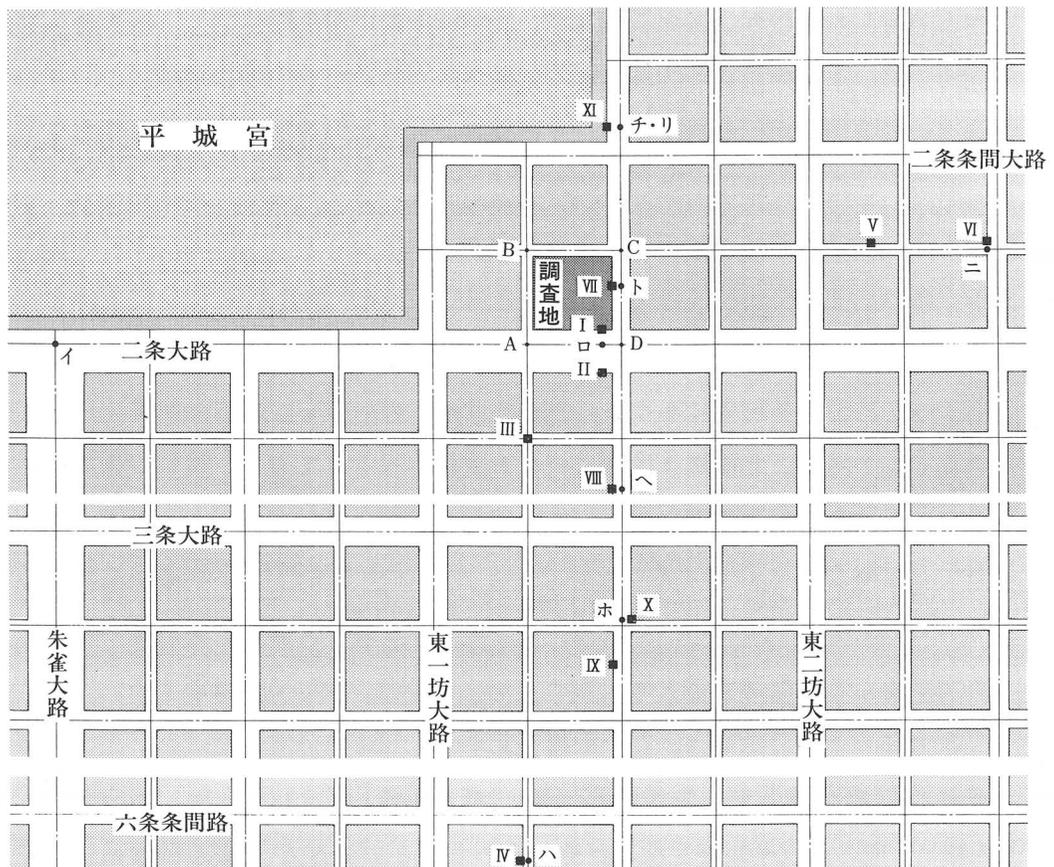


図38 関連条坊図

点	条坊道路	種別	X座標	Y座標	文献	座標値の典拠
I	二条大路	北側溝心	-146,005.00	-17,802.00	1	実測図
II		南側溝心	-146,043.25	-17,802.00	1	実測図
III	東二坊坊間西小路	路心交点	-146,150.15	-17,919.90	1	実測図
IV		西側溝心	-147,940.00	-17,914.39	2	文献2
V	二条条間南小路	北側溝心	(-145,879.40)	(-17,440.00)	3	文献3の図
VI		(北側溝心)	-145,874.20	-17,276.00	4	文献4の図
VII	東二条坊間路	西側溝心	-145,938.00	-17,792.90	5	実測図
VIII			-146,254.563	-17,791.583	6	文献6
IX			-146,736.00	-17,789.34	7	文献7
X		東側溝心	-146,675.00	-17,779.85	8	文献8
XI		西側溝心	-145,728.71	-17,798.83	9	実測図

点	条坊道路	種別	X座標	Y座標	座標値の典拠
イ	二条大路	条坊計画線	-146,019.35	-18,586.20	朱雀門心より算出
ロ			-146,017.75	-17,802.00	IとIIの midpoint
ハ	東二坊坊間西小路	路心	-147,940.00	-17,910.84	IVの東3.55m
ニ	二条条間南小路	路心	(-145,877.226)	(-17,257.787)	文献4の推定
ホ	東二坊坊間路	路心	-146,675.00	-17,784.73	VII-IXとXの midpoint
ヘ			-146,254.563	-17,786.637	文献6
ト			-145,938.00	-17,788.02	XIIの東4.88m
チ		条坊計画線	-145,728.71	-17,786.40	XIの東12.43m
リ			-145,728.71	-17,788.95	ホ～トの延長

表9 関連条坊座標一覧表

文献

- 1 本中 真「道路と敷地」(奈良国立文化財研究所編『平城京長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館)1991年
- 2 森下恵介「平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度』)1982年
- 3 奈良国立文化財研究所「左京二条三坊三坪の調査 第156-18次」(『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)1985年
- 4 浅川滋男「左京二条三坊六坪の調査 第215-1次」(奈良国立文化財研究所『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)1991年
- 5 寺崎保広「左京二条二坊五坪調査(2) 第223-13次」(本書所収)1992年
- 6 奈良国立文化財研究所「左京三条二坊七坪の調査(第118-23次)」(『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)1980年
- 7 立石堅志「平城京左京四条二坊七坪の調査」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』)1985年
- 8 鐘方正樹「平城京左京四条二坊々間路の調査 第133次」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』)1988年
- 9 阿部義平「第44次調査」(『奈良国立文化財研究所年報1968』)1968年

対してかなり北に偏している。かりに、東二坊坊間西小路の推定路心上でAの北133.2mの位置に二条条間南小路の路心（B）を想定すると、両者を結ぶ直線の振れは39' 12" と過大となる。第215-1次調査で北側溝とされた溝（SD03）は、東三坊坊間路西側溝に接続せずその手前でとぎれており、築地の西雨落溝にあてうる南北溝（SD05）とL字形に接続するなど、道路側溝としては不自然な点がある。調査区の南端における検出で、以南の状況が不明であることを考えあわせれば、築地の北雨落溝である可能性も想定されよう。よって、これを二条条間南小路の北側溝と確定するには慎重にならざるをえない。

ちなみに、道路側溝の内側に並行し、築地雨落溝にあてうる溝を検出した例はいくつかある。これらの溝と道路側溝との心々間距離は、左京四条二坊七坪では3.6~3.9m（13尺）（注3）、左京八条三坊十一坪（東市推定地）で3.9m（注4）、左京六条二坊十坪の例で3.2m（注5）、左京（外京）三条五坊四坪が4.4mである（注6）。そこで、第215-1次調査のSD03の南3.9mに側溝心、そこから10大尺（3.55m）南に路心を仮定すると、これと先述のBを結ぶ直線の振れは、16' 44" となる。この値は、朱雀大路の振れ（15' 41"）をはじめ東二坊坊間路や後述の東二坊坊間路西側溝の振れに近く、上記の想定が無理でないことを示すものとみられる。

以上のように、二条条間南小路の位置と振れについては資料的に問題があり、確定しがたい。そこで、ここでは先述の推定路心（B）を基点として、二条大路条坊計画線の振れと同じ振れを想定しておく。幅員については、側溝心々間距離で20大尺（24尺）とみておきたい。

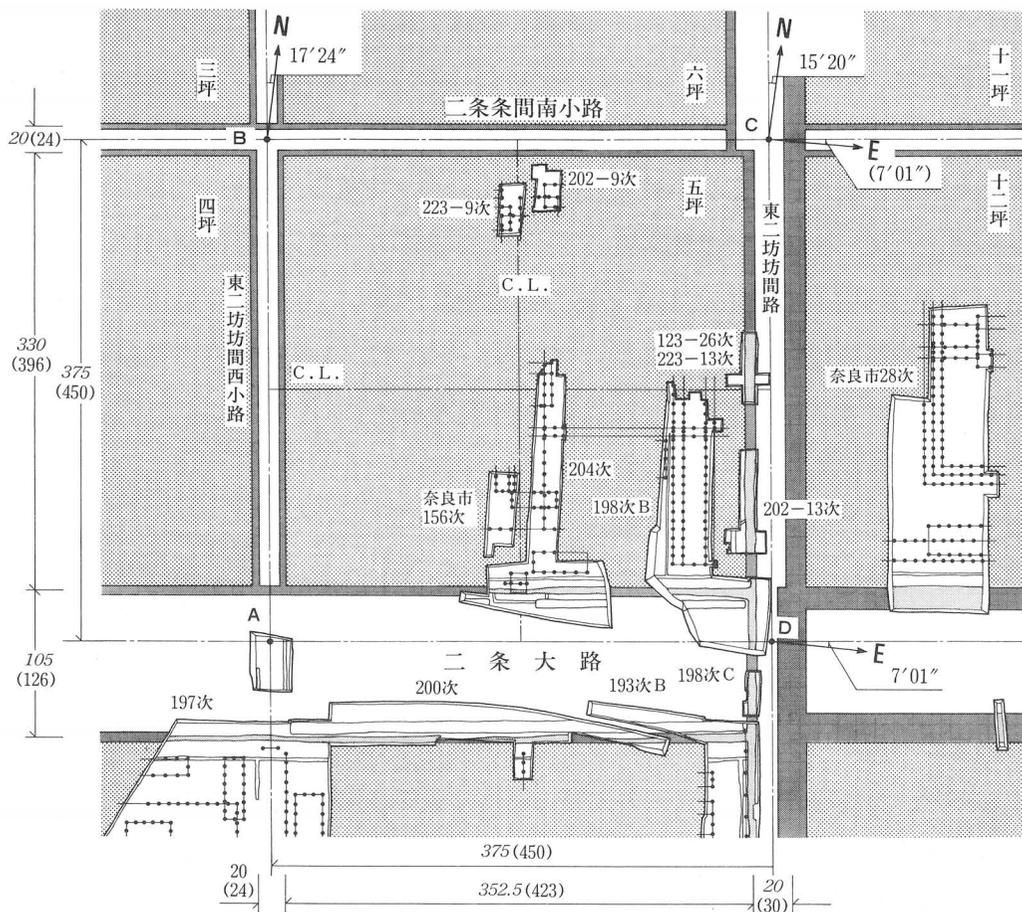
東二坊坊間路 西側溝・東側溝ともに検出例があるが、二条条間南小路を境に幅員が変更されているとみられ、複雑な様相を呈する。

まず二条条間南小路以南では、今回の調査地である左京二条二坊五坪を含み、かなりの長さにわたって西側溝が検出されている（Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ）。この振れは、15' 20" 前後の安定した数値を示す。また左京四条二坊では東側溝を検出しており（Ⅹ）、これに近い西側溝検出例（Ⅸ）から、当該部分における路心（ホ）を推

定することができる。この場合、西側溝の振れを用いて修正した幅員（側溝心々間距離）は、9.76mとなる。これは、25大尺（30尺）と復元しうる可能性があるが、厳密には大尺・小尺のいずれによっても完好な値とならない。しかし、三条大路を隔てた左京三条二坊の調査地において、東二坊坊間西・東小路路心の midpoint から求めた東二坊坊間路の推定路心（へ）と西側溝心（Ⅷ）の間隔は4.9m（文献6）とされている。つまり、左京三条二坊・四条二坊のいずれにおいても、東二坊坊間路の幅員は約9.8mであることになる。そこで、二条条間南小路以南の道路幅員は一定であったとみて、Ⅶの東4.88mに路心（ト）を想定しておく。また、ホートを結ぶ直線と二条大路条坊計画線の交点をD、Bを基点とする二条条間南小路推定路心との交点をCとする。

一方、平城宮東院東面大垣に接する部分では、第44次調査により西側溝が検出されている。側溝心（Ⅺ）は、東面大垣隅心（X-145,728.71、Y-17,811.13）の12.30m東にある。この距離は35大尺（42尺、復元値は12.43m）とみられるが、東院東面大垣心は、東二坊坊間路の条坊計画線から70尺大尺西と想定される（注7）ので、西側溝心の東35大尺の位置に条坊計画線を求めることができる（チ）。なお西側溝は、二条条間大路を横切って南へ貫流しているが、交差点以南においてもそのまま延びているので、少なくともこの部分では幅員は広いままである。二条二坊五坪では西側溝が東へ寄るが、その幅員の変更はおそらく二条条間南小路との交差点でなされているのであろう。

ところで、このように平城宮周辺で推定した東二坊坊間路条坊計画線（チ）と、二条大路の南で得られた路心（ホ）を結ぶ直線は、6' 04" の振れをもつ。この値は、発掘で得られた西側溝の振れ（15' 20"）にくらべてかなり小さい。そのためこれを条坊計画線とすると、東二坊坊間路の幅員は、二条条間南小路以南においても、北へ行くにしたがって広がっていることになる。一方、幅員を一定として西側溝のデータから求めた推定路心を北に延伸すると、東院東南では条坊計画線から西に2.55mのずれを生じる（リ）。したがって、上記の復元には、座標値を含めてどこかに問題があるものと思われる。しかし、東二坊坊間路の幅員が



	X	Y	X	Y	
A	-146,017.99	-17,920.57	C	-145,884.52	-17,778.26
B	-145,884.79	-17,921.24	D	-146,017.72	-17,787.66

図39 左京二条二坊五坪四周の条坊復原 (1/2000) 斜体大尺 () 小尺

漸次広がっているとは考えがたく、ここでは発掘で得られた側溝の位置と幅員に関する直接的な知見を尊重し、前記のキーケを結ぶ直線を条坊計画線と見ておく。

以上の作業により復原された左京二条二坊五坪の四至を図39に示す。二条大路と二条間南小路の条坊計画線間の距離は133.20mと仮定したが、東二坊坊間西小路と東二坊坊間路の間隔は、坪の北辺で132.98m、南辺で132.91mと近似した値を示す。なお、対辺側溝心々間距離は、北辺が124.55m、南辺が124.48mとなり、東辺と西辺はこれに比べ116.90mと短い。

5 二条大路の幅員について

二条大路の幅員については、平城宮南面における第32次・第122次調査などの成果により、側溝間心々間距離で105大尺（復原値37.31m）とされている。ところが前節で述べたように、左京二条二坊五坪南辺では側溝の幅自体がやや狭くなっており、心々間距離も38.25m前後である。この場所ではとくに北側溝が何回か掘り直されているが、新しい時期の北側溝は南岸が北に寄っているため、心々間距離はさらに広がり、39.0mほどとなる。したがって、実際にはこれらをすべて105大尺と見るのは難しいと思われる。

一方、東二坊坊間路の東側では、二条大路の両側溝はともに幅が広がっており、路面幅および心々間距離は狭くなる（注8）。後者については、90大尺（108尺）とみる見解が示されている（注9）。

しかしながら、前記の事例とあわせて別の視点からみると、二条大路の北側溝の北肩（岸）と南側溝の南肩（岸）は、それぞれ東西に揃っていることが注目される。これは、北側溝では何度かの掘り直しを通じて認められる特徴である。また南側溝は、東二坊坊間路以西では調査地点により幅員が一定しないが、この場合も南肩はほぼ一直線に通っている。したがって、側溝心々間距離では場所により異なった数値を示すものの、北側溝北肩と南側溝南肩の間隔は、約41.0mとほぼ一定している。そしてこうした状況は、東二坊坊間路を隔てた東側においても変わらない。つまり、二条大路の北側溝は当初の幅6.0m以上、南側溝は幅8.7mと広がっているが、北側溝の北肩と南側溝の南肩は、それぞれ東二坊坊間路以西と一直線に通っている。

以上の点からみると、当該地付近における二条大路の側溝の位置は、北側溝北肩・南側溝南肩を東西に一直線に通すかたちで決められた可能性が高いと思われる。これは、条坊設定の基準が心々間距離ではなかったことを意味するものではない。少なくとも平城宮南辺においては、前記のように大尺を用いた心々間距離による設定が行われているが、それを延伸する場合は側溝の肩を延長するという方法がとられた場合があったことが想像されるのである。

また、道路側溝が実際に都市の排水体系として機能した以上、交差点を境として側溝が拡幅・縮小されることは当然ありえた。その際に、側溝の肩は計画心から両側に振り分けるのではなく、宅地側の肩はそのまま延長して、路面側の肩の位置を変えることにより側溝幅を変更した可能性がある。東二坊坊間路を境として二条大路の幅員が変化するのも、これに相当するものであろう。つまり、坊間路以東で心々間距離がまず105大尺から90大尺に減じられ、それに応じて側溝が設定されたのではなかろう。

なおこのような想定は、大量の木簡を出土した二条大路路面上の大溝SD5100・SD5300・SD5310のあり方についても示唆を与える。少なくともこれらの溝は、東二坊坊間路以東の二条大路両側溝の幅の中におさまっており、それとの比較の上では、路面上に張り出すものではなかったのである。

一般に条坊の設定は、施工は別とすれば、複数の基点における距離測定—位置決定と、その延長という二つの工程からなると考えられる。この両者は本来区別される性質のものであろう。そして、後者が側溝の肩の延長という形でなされる場合があったとすれば、側溝幅の変更により、心々間距離も変化することになる。道路幅員が側溝心々間距離で完好的な数値とならない事例は、この表れではないだろうか。もちろん、こうした具体的な復元を行うためにも、今後の資料的蓄積とより厳密な検討が不可欠であることは言うまでもない。 (小沢 毅)

注

- (1) 浅川滋男「左京二条二坊五坪北辺の調査 第202-9次」(奈良国立文化財研究所『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)1990年。
- (2) 井上和人「古代都城制地割再考」(『研究論集Ⅶ』)1985年。
- (3) 奈良美穂・篠原豊一「平城京左京四条二坊七坪の調査」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』)1984年および文献7。
- (4) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査Ⅱ 第4次発掘調査概報』1984年。
- (5) 篠原豊一「平城京左京六条二坊九・十坪の調査」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』)1984年。
- (6) 西崎卓哉「平城京左京(外京)三条五坊四坪の調査」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』)1985年。
- (7) 註(2)に同じ。
- (8) 奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪 奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』1984年。
- (9) 井上和人「都城の定型化」(『季刊考古学』第22号)1988年。

7 左京二条二坊々間路西側溝の調査 第223-13次

店舗建設に伴い実施したもので、左京二条二坊五坪の東辺を限る東二坊坊間路西側溝の調査である。これまでに行われた同溝の調査は、五坪東辺に限っていえば、北から第123-27次,202-13次,198次-B調査の三ヶ所である。今回の発掘区は第123-27次と重複し、同発掘区を含め全長19mにわたって溝の部分を対象とし、溝の状況の確認と遺物の取り上げを行った。発掘面積は約80㎡、である。

基本的な層序は上から耕土(40cm)、床土(25cm)の下に黄褐土と暗灰粘土の2層の遺物包含層が約20cmずつあり、その下が遺構面となる。

検出した遺構は東二坊坊間路西側溝SD5021と、これに西から流入する2条の東西溝(SD5608,SD5609)である。SD5021は溝幅3m、深さが70cmで、その土層は上から①暗褐粘質土、②灰色砂土、③砂混り暗灰粘質土、④砂混り暗灰土、⑤暗灰粘土の5層に分かれる。最上層①が埋土で、その下の4層が堆積土と判断した。SD5021の堆積土はこれまで3層に大別されているが、それに対応させるとすれば、②と③を上層、④を中層、⑤を下層と見ておく。発掘区中央付近の溝西岸に杭が五本残っており、護岸に用いたのであろう。

東西溝SD5608は、溝幅1.2m、深さ0.6mで、SD5021への流入部付近に2本の杭が残っている。SD5609は幅0.5m、深さ0.4mである。この2条の東西溝がSD5021のどの層と対応するのかは、判然としない。

遺物としては、木簡49点のほかに、15点が目立ち、軒瓦7点、破片であるが緑釉熨斗瓦と三彩平瓦などがある。年代を示すものとして木簡を三点掲げる。

1 (表)薄鯪卅四斤 調物

(裏)宝亀□□[四年カ]料 149・23・1 031

2 安房国安房郡廣湍郷沙田里神麻部 [] (172)・22・6 039

3 伊予郡石田里□□□[藺部臣カ]□ 123・21・3 033

1は上層から出土し、2は郷里制の時期(715-740年)、3は里制の時期(701-715年)のものでともに下層から出土した。(寺崎保広)

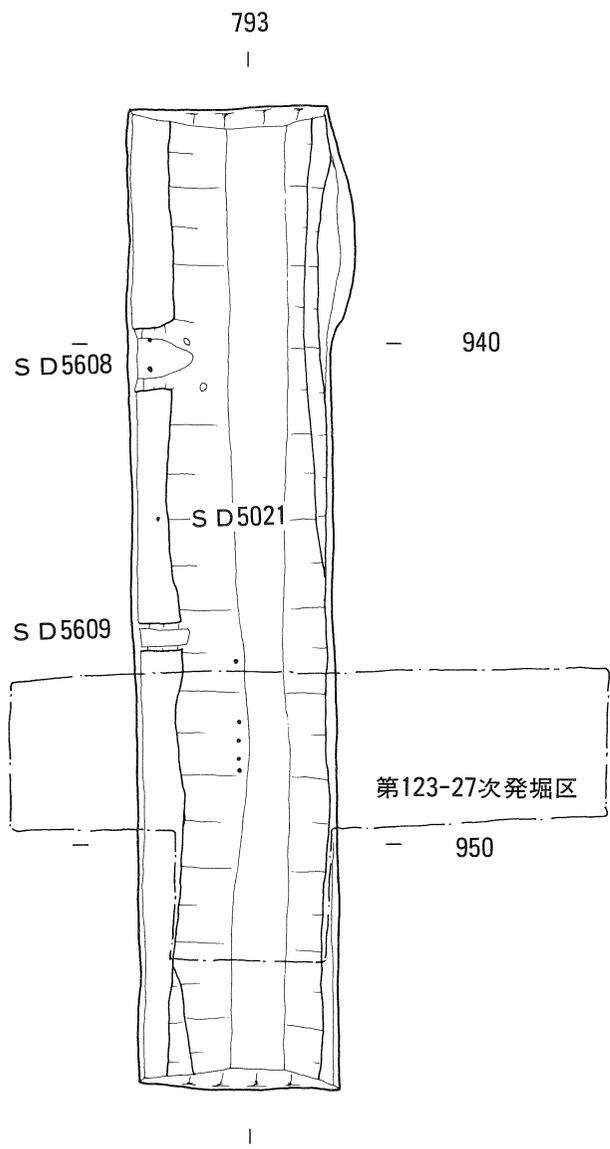


图40 第223-20次遺構図 (1/150)

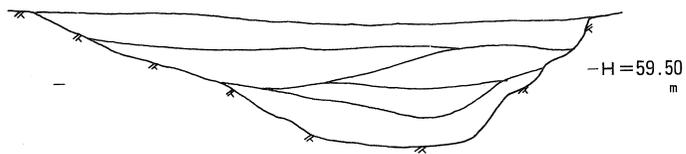


图41 发掘区北壁断面图 (1/40)

8 田村第推定地の調査 第223-20次

1 はじめに

この調査は、ビル建設に伴う事前調査である。調査地は、藤原仲麻呂の邸宅田村第の故地と推定されている左京四条二坊九～十六坪の八つの坪のうち、北東隅の十六坪の南端中央部にあたる。田村第推定地ではこれまで数回にわたって発掘調査が行われており、同じ十六坪の南西部（今回の調査地の西に接する水田）では密度の高い遺構を、また十六坪北端でも小規模な建物、井戸などを検出している。一方十五坪における調査では、大規模な礎石建物を検出しており、既に報告書が刊行されている（『平城京左京四条二坊十五坪

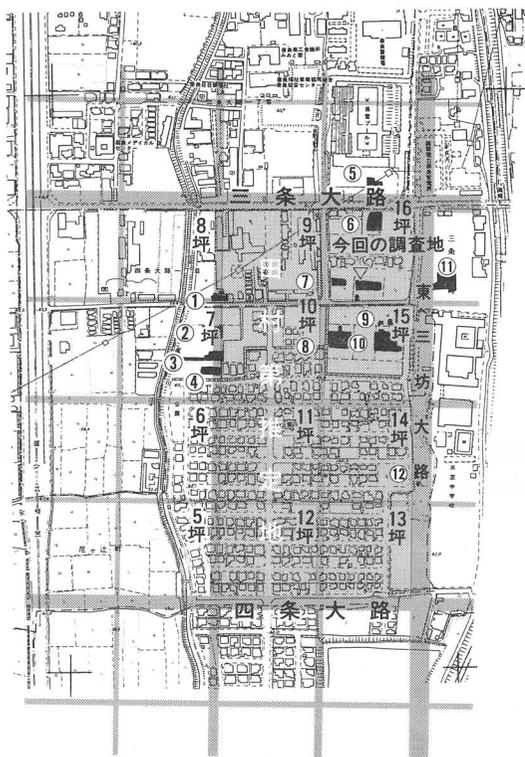


図42 田村第推定地近辺の調査

- 1 奈良市教育委員会、1987年調査（第133次）（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和62年度、1988年）
- 2 奈良市教育委員会、1984年調査（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度、1985年）
- 3 奈良市教育委員会、1984年調査（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、1984年）
- 4 奈良市教育委員会、1983年調査（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、1984年）
- 5 橿原考古学研究所、1975年調査（『平城京左京三条二坊十三坪』、1975年）
- 6 奈良市教育委員会、1987年調査（第136次）（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和62年度、1988年）
- 7 奈良市教育委員会、1983年（『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、1984年）
- 8 奈良国立文化財研究所、1977年調査（第105次）（『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1977年）
- 9 奈良国立文化財研究所、1982年調査（第145次）（『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告－藤原仲麻呂田村第推定地の調査』、1985年）
- 10 奈良国立文化財研究所、1984年調査（第193-6次）（昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1989年）
- 11 奈良国立文化財研究所、1984年調査（第156-8次）（平城京左京四条二坊十五坪発掘報告－藤原仲麻呂田村第推定地の調査』、1985年）
- 12 奈良国立文化財研究所、1980年調査（第123-6次）

発掘報告－藤原仲麻呂 田村第推定地の調査』、1985年。以下、『田村第』と略記)。田村第推定地の南半は、既に未調査のまま住宅団地と化しており、北半も開発の及んでいない地域は限られている。今回の調査地は、その中で水田として残されてきたわずかな場所の一つである。

調査は1992年1月10日に開始し、2月20日に終了した。調査面積は北調査区約400㎡、及び十五・十六坪坪境の四条条間小路北側溝の検出を目的とした南調査区約25㎡である。以下、単に調査区といえば北調査区を指すものとする。

2 基本層序

調査地の基本的な層序は次の通りである。上から順に、黒色腐植土層（水田耕土）20～30cm、青灰色粘質土層（床土）10～20cm、青灰色砂質粘土層10～20cm、灰褐色微砂層約10cm、灰褐色粘土層10～20cm、灰色粘土層（室町時代の土器を含む）20～30cmと続き、現地表面から80～100cmで奈良時代の整地層である茶褐色粘質土層（調査区西半に広がる。厚さ約10cm。前述の奈良市の調査でも確認している）、または地山の黄灰色粘土層ないし灰色砂層（砂層は南調査区で顕著）に至る。なお、調査区西半南部には、茶褐色粘質土層を切る形で土師器や炭を含む茶灰褐色砂質粘土による深さ10～20cmの整地がみられる。

奈良時代の遺構面の直上には室町時代の遺物を含む地層が広がり、奈良時代の遺物包含層はほとんど存在しない。また残存する柱穴の深さからみても、奈良時代の遺構は東を南流する佐保川の洪水によりやや削平を受けているものと考えられる。なお、遺構は基本的には整地土を取り除いた地山面で検出した。地山面の標高は概ね58.9～59.0mである。

3 遺構

遺構は調査区東部と北西隅に集中する。換言すれば、十六坪の東西中軸線を挟んで対称の位置に遺構が密に分布し、坪の南辺中央部は遺構が疎であるといえる。検出した主な遺構は、建物14棟以上、塀3条、溝4条、井戸1基、土坑5基、石組暗渠1基などである。一方南調査区では、予想通り四条条間北小路北側溝などを検出した。

調査区内で完結する遺構が少なく、遺構が集中する部分が分かれるため、遺構相互の関係を捉えにくく、また後述のように遺物が少なく時期をおさえにくいので、まず遺構ごとに概要を述べ、次節で時期変遷を簡単に整理することにする。

SB01 調査区東端部で検出した掘立柱南北棟建物。桁行4間以上、柱間約2.85m（9.5尺）等間。梁間2間、柱間は西から約2.7m（9尺）、約3.3m（11尺）。さらに調査区の南に延び、南妻は未検出である。柱掘形は一辺70～80cmの隅丸方形で、東側柱の掘形はやや大きい。現存深さは20～40cmである。東側柱の北から2番めの柱穴の底から平瓦が数枚重なった状態で出土し、礎盤としての機能を果たしたものと考えられる。また、西側柱の北から2番めの柱穴掘形から平城宮土器編年Ⅰ～Ⅱ（以下、平城Ⅰ～Ⅱのように略記）の土師器高杯が出土した。SB02より古い。

SB02 調査区東部で検出した西庇付掘立柱南北棟建物。桁行4間以上、柱間約2.0m（7尺）等間。梁間2間、柱間は2.0m（7尺）等間。庇の出は約2.2m（7尺5寸）。さらに調査区の北へ延び、北妻は未検出である。建物の軸が北でやや西に触れる。柱掘形は一辺40～50cmの隅丸方形で、現存深さは30～40cmである。SB01より新しく、SB05・SK09より古い。

SB03 調査区南東端で北妻のみ検出した掘立柱建物。梁間2間で東庇付の南北棟建物と考えられる。柱間は約2.1m（7尺）等間。庇の出は約1.8m（6尺）。柱掘形は一辺40～50cmの隅丸方形であるが、庇の柱掘形は一辺30～40cmとやや小振りである。現存深さは20～30cmと浅く、柱痕跡の残るものが多い。SA06より新しい。

SB04 調査区南東端で一部を検出した掘立柱建物。2間×3間の東西棟、ないし梁間2間で東か西に庇が付く南北棟かと考えられる。柱間は約2.0m等間（7尺）。柱掘形は一辺40～50cmの隅丸方形ないし矩形でやや不揃いである。現存深さは30～40cmで、柱痕跡を残すものもある。

SB05 調査区北東端で3間分検出した掘立柱建物。SB02より新しい。東西棟か南北棟かは不明。柱間は約2.4m（8尺）等間。柱掘形は、南北約80cm、東西約60cm

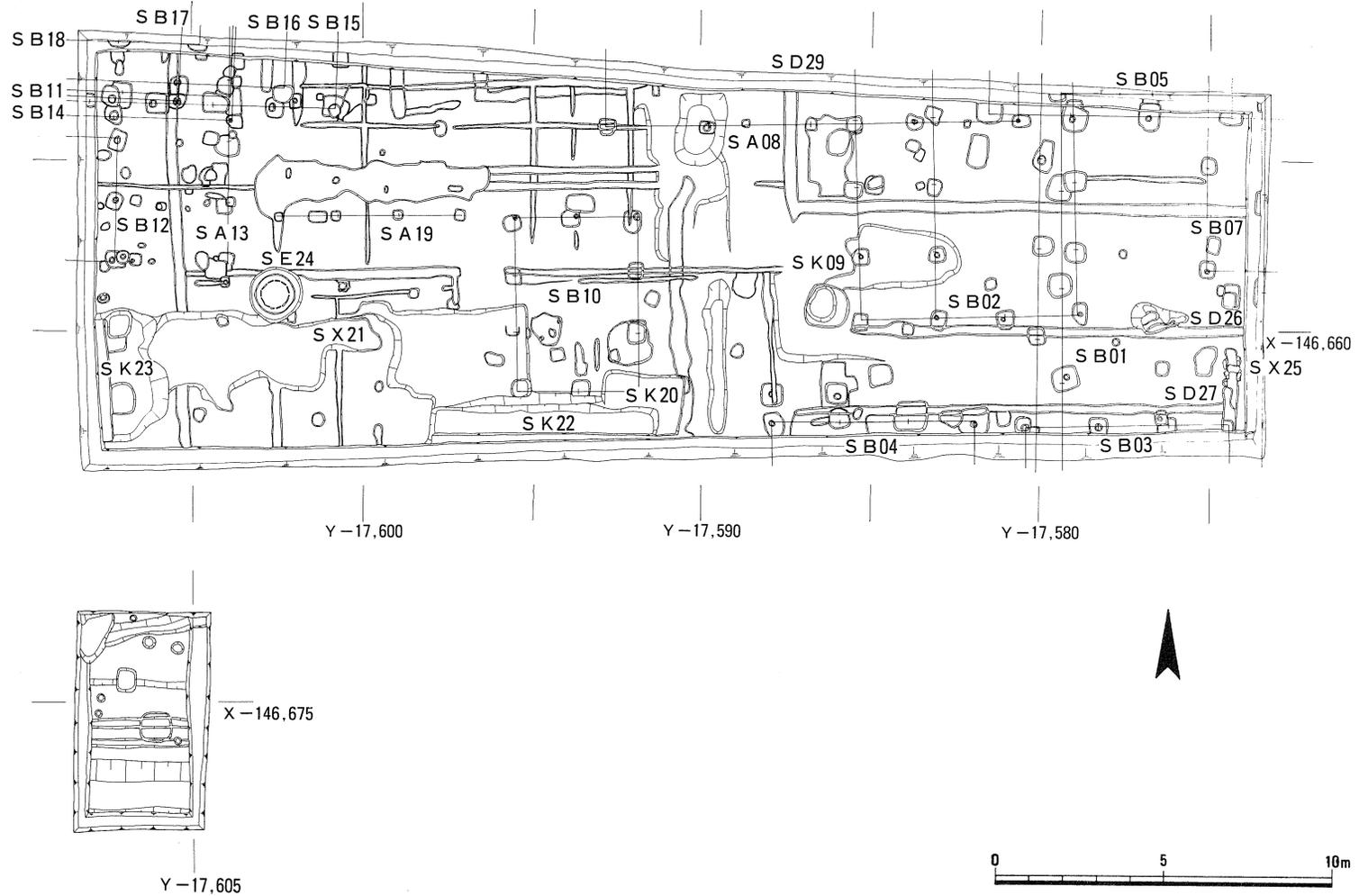


図43 第223-20次調査遺構図 (1/200)

程度の大型の隅丸矩形で、現存深さは約30cmである。SB02より新しい。

SA06 調査区東部で検出した掘立柱南北塀。SB03より古い。柱間は約2.65m（9尺）等間。柱掘形は一辺40～50cmの隅丸方形で、深さは20～50cm、柱痕跡を残すものもある。十六坪の東西幅をほぼ7:5に内分する位置に相当し、坪内を分割する区画塀の可能性がある。十六坪北端の奈良市1987年の調査区までは延びない。

SB07 調査区東端で柱穴2基を検出した掘立柱遺構。建物の南西隅部分で、さらに調査区の東と北へ延びるものと考えられる。柱間は約3m（10尺）、柱掘形は一辺約40cmの隅丸方形で、現存深さは約30cmである。

SA08 調査区北端で4間分を検出した掘立柱塀。建物の南側柱列の可能性も残る。柱間は約3m（10尺）等間。掘形は東西50～60cm、南北40cm程度の矩形を呈する。現存深さは30～50cmで、柱痕跡を残すものもある。本調査区の中では掘形の大きさの割にはやや深い。なお、西から2番めの柱穴掘形から、平城Ⅲ（？）の須恵器の蓋が出土した。

SK09 調査区東部に広がる不整形の土坑。深さは10～20cmで、埋土は青灰褐色砂質粘土。平城Ⅳを主体とする土器が出土し、短期間に埋められた様相を呈す。主なものに土師器の皿・高杯・碗2点などがある。SB02より新しく、埋土を除去した土坑の底でSB02の柱穴を検出している。

SB10 調査区中央部で検出した掘立柱南北棟建物。桁行3間、柱間は約1.7m（6尺弱）等間、総長5.1m。梁間2間、柱間は約1.8m（6尺）等間、総長3.65m。柱掘形は一辺50～60cm程度の隅丸方形。北妻の柱穴3基は現存深さ約50cmと深く、直径約12cm（4寸）の腐食した柱根を残す。これらの柱穴3基はいずれも柱が掘形の隅に位置する特徴がある。他の柱穴は比較的浅く、南妻の柱穴は現存深さ約20cmである。なお、東側柱列南端の柱穴は、性格不明の土坑SK20により完全に壊されており、また西側柱列南端及び南から2番めの柱穴は、SX21の底でかろうじて検出できた程度である。

SB11 調査区北西端で柱穴2基を検出した掘立柱遺構。建物の南東隅部分と考えられる。柱間は3～3.3m（10～11尺）、掘形は一辺60～80cmの隅丸方形で、本調

査区内の柱穴としては最も大きい。現存深さは20～40cmで大きさの割にやや浅い。調査区北西端で重複する建物の中では最も古い。

SB12 調査区西端で、東妻のみを検出したと考えられる掘立柱建物。梁間1.8m（6尺）等間、総長3.6m。さらに調査区の西へ延びるが、西側の奈良市の調査区までは延びない。掘形は一辺40～60cmの隅丸矩形でやや不定形、灰色粘土の埋土を特徴とする。現存深さは20～30cmで、柱痕跡を残す。

SA13 調査区西部で検出した掘立柱南北塀。柱間は約1.8m（6尺）等間で、3間分検出したが、さらに調査区の北へ延びると考えられる。SB12の東妻から約3.3m（11尺）の位置に柱筋を揃えて建てられている。SB12に伴う塀か。柱掘形は一辺40～60cmの隅丸矩形でやや不定形。現存深さは20～30cmとやや浅く、灰色粘土を埋土とする点もSB12の柱穴と共通する。

SB14 調査区北西端で検出した掘立柱遺構で、建物の南東隅部分と考えられる。柱間は桁行・梁間とも1.8m（6尺）等間に復原できる。柱掘形は一辺40～50cmの方形でやや不定形、柱痕跡を残すものもある。現存深さは20～30cm。SB11より新しく、SB15・16・17より古い。

SB15 調査区北西端で検出した掘立柱建物。桁行は4間分、梁間は1間分確認したが、桁行5間以上で柱間約1.8m（6尺）等間、梁間2間以上で柱間約1.8m（6尺）等間の東西棟と考えられる。柱掘形は東西約70cm、南北約60cm程度のやや東西に長い隅丸矩形で、柱痕跡を残すものが多いが、南東隅の柱穴は柱を抜き取っている。現存深さは50～60cmと今回の調査区の中では深い。西から3つめの柱穴には、残りは悪いものの長さ30cm、幅15cm、厚さ10cm程度の木製の礎盤が用いられていた。また、南側柱東から2番めの柱穴掘形から、平城Ⅲの須恵器の蓋が出土した。SB11、SB14より新しく、SB16、SB17より古い。

SB16 調査区北西端で柱穴2基を検出した掘立柱遺構で、建物の南東隅部分と考えられる。柱間3～3.3m（10～11尺）、柱掘形は一辺50～60cmの隅丸方形で、現存深さは30～40cm、西側の柱穴には柱痕跡がある。SB11、SB14、SB15より新しく、SB17よりも古い。

SB17 調査区北西端で柱穴2基を検出した掘立柱遺構で、建物の南東隅部分と考えられる。柱間は約1.95m（6尺5寸）。西側の柱穴は現存深さ約30cmで、柱痕跡が残る。東側は現存深さ約50cmで、長さ約50cm、直径約12cm（4寸）の柱根が残る。SB18よりは古いが、調査区北西端の他のどの建物よりも新しい。

SB18 調査区北西隅の北排水溝内、及び調査区北壁で確認した柱穴2基よりなる。これよりは東には続かず、建物の南東隅部分を検出したのであろう。柱間は約2.4m（8尺）。現存深さは60～70cmで、今回の調査区の中では最も深い。柱穴は茶灰褐粘質土の整地土の上面から掘られている。

SA19 調査区西よりで検出した柱間3間の掘立柱東西塀。柱間は約1.8m（6尺）等間、総長5.4m。柱掘形は一辺約30cm程度の方形だが、現存深さは掘形が小さい割に30～40cmとやや深い。

SK20 調査区中央部南端で検出した性格不明の方形の土壌。東西約2.4m、南北2.2m以上で、さらに調査区の南に延びる。深さは約70cm。遺物は含まない。SX21、SK22より古い。

SX21 調査区南西部に広がる不整形のくぼみ。東西約15m南北幅最大4mに及ぶ。深さは10～20cm。土師器・炭を含む茶灰褐色砂質粘土で埋められている。底でSB10の柱穴を確認しており、SB10よりも新しい。また、SE24より古い。平城Ⅲを主体とする土師器を多く含み、主なものに、平城Ⅲの高杯2個体、Ⅱ～Ⅲの須恵器杯B、ⅢないしⅣの土師器皿Aがある。

SK22 調査区中央部南端で検出した東西に長い溝状の土壌。性格不明。東西約6.8m、南北1.3m以上で、さらに調査区の南に延びる。深さは約30cm。SK20、SX21より新しく、奈良時代末から平安時代初めにかけての土器を含む。

SK23 調査区西端でSX21の底で検出した土壌。埋土は青灰粘土。深さ30～40cm。上部はSX21と同じ土師器・炭を含む茶灰褐色砂質粘土で整地されている。

SE24 調査区西部で検出した井戸。掘形は東西径約150cm、南北径約160cmのほぼ円形を呈する。掘形の埋土は暗灰褐色粘土。検出面から約50cmのところまで直径が約120cmに狭まり段がつく。井戸枠は豎板12枚組、上端は腐食しているが、現存

最大長230cm、幅25cm、厚さ8cm、下端から約95cmの位置に一箇所ほぞを設けている。井戸枠内の埋土は上から青灰褐色粘質土、暗青灰色粘土、暗灰色粘土と続き、検出面から130~160cm付近、暗灰色粘土の層の途中で骨を多く含む部分があり、この下の検出面から190cm付近までの間で瓦が数点出土した。竪板下端の深さから径約70cm、高さ約50cmの曲物が据えてあり、その下部の検出面から約260cmで灰色砂の湧水層に達する。遺物としては、検出面近くの井戸枠内の青灰褐色粘質土から9世紀中頃から後半にかけての土師器の杯、掘形から奈良時代末の土器、曲物内の下部より平城IV~Vの須恵器の皿・漆の付着した須恵器の壺を初めとする奈良時代末の土器、曲物底板、斎串、鉄製刀子などが出土している。8世紀後半から9世紀中葉まで存続したと考えられよう。

SX25 調査区東南隅で検出した石組暗渠。時代を特定できないが、検出面がやや高く、平安時代以降のものと考えられる。2条の溝SD26・27に伴うものである。

SD26・27 石組暗渠SX25に伴う2条の東西溝で、間隔は心々で約2.2m。SD26は約11.5m分、SD27は約13m分検出した。SD26はさらに調査区の東に延びるが、SD27は石組暗渠SX25南端部で南に折れ曲がり、さらに調査区の南に延びる。いず

H=59.4 m

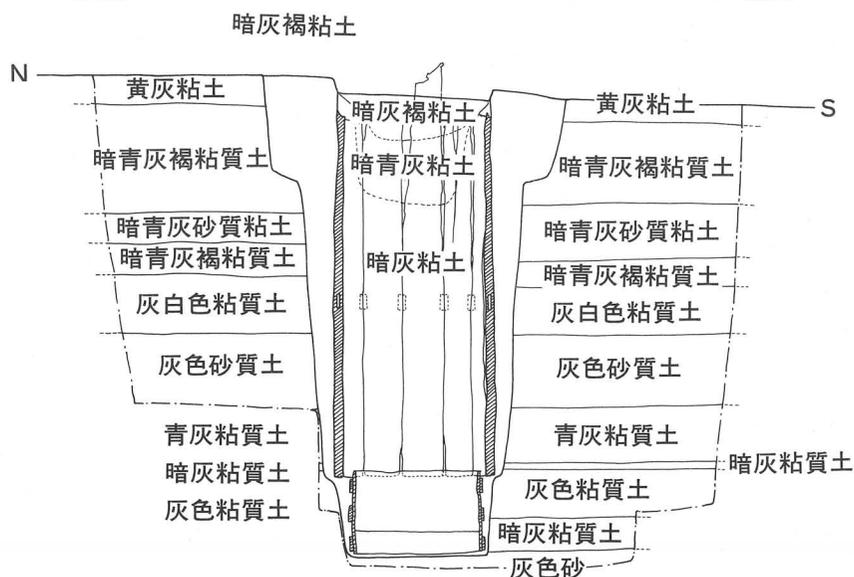


図44 井戸SE24断面図

れも幅は20～30cm。深さは約10cm。

SD28・29 調査区東部北端で検出したL字型に連続する溝。東西溝SD28を約13.5m分、その西端に接続する南北溝SD29を約3.5m分検出した。ともに幅30～40cm、深さ約20cm。SB05などに伴う区画溝か。

SK30 南調査区北端で検出した東西溝状の土坑。南端のみ約3m分を検出した。下層の暗灰色砂質粘土、上層の茶灰褐色砂質粘土（土師器や炭を多く含む）に分かれる。上層は北調査区のSX21と同質の埋土であり、同様の性格のくぼみを同時に整地したものであろう。上層から平城Ⅲの須恵器の蓋が出土している。

SD31 南調査区南端で約3m分検出した東西溝。位置から考えて、既に左京四条二坊九・十坪間の四条条間北小路（九・十坪坪境小路）で検出されている（奈良市第133次調査。『昭和62年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』）同小路北側溝の東延長部分と考えられる。但し、これまでの推定位置（『田村第』参照）からはややずれる。南端を検出していないので正確な溝幅は不詳ながら、溝底からの立ち上がりから推すと、幅は約2.5mとなろう。深さは約50cm、埋土は下層の暗灰色砂土（約30cm）、上層の茶灰褐粘質砂土（約20cm）の2層に分かれる。下層は流れに伴う堆積土、上層は土師器や炭を多く含む埋立の土である。上層はSK30、SX21の埋土と同質であり、これらは同時期の一連の整地に伴うものと考えられる。溝心の座標は、 $X = -146,677.800$ 、 $Y = -17,608.000$ である。

SX32 SD31の北側で検出した柱穴1基。掘形は一辺80～90cmの隅丸方形で、現存深さは約30cmと浅い。十六坪南辺の東西塀の一部か。

4 遺物

今回の調査区では、遺構検出面の直上に室町時代の遺物を含む地層が広がる。従って奈良時代の遺物包含層はほとんどなく、整地層の茶褐色粘質土あるいは地山の黄灰色粘土上面に瓦や土器の小片が散布するのみであった。遺構に伴って出土した遺物は少ない。

まず、瓦では、軒丸瓦2点、軒平瓦6点が出土した。内訳は、軒丸瓦は型式不明のもの2点で、調査区中央北端の遺物包含層、及び南調査区のSD31より出土した。

軒平瓦は、6663F、4点が調査区中央から西部にかけての遺物包含層、及び耕作溝から出土し、6721、1点がSK09上面の遺物包含層より出土した。この他、重圏文軒平瓦（型式不明）1点が調査区北西端の遺物包含層より出土している。十五坪で行った調査での軒瓦の出土は1㎡あたり0.02点で（『田村第』）、今回の1㎡あたり0.019点と大差はない。なお、丸瓦は113点12.3kg、平瓦は980点95.6kgが出土し

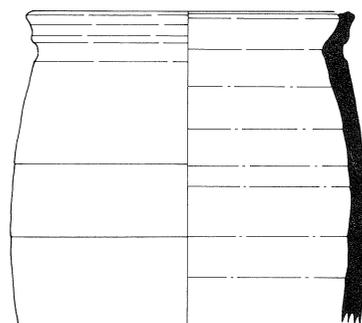


図45 須恵器長胴甕（1／4）

た。軒平瓦6663F、6721は十五坪の調査でも出土していたもので（『田村第』）、今回の時期変遷ではC～D期に相当する時期の遺物である。

土器では、SB01の柱穴から平城Ⅰ～Ⅱの土師器高杯、SK09から同Ⅳの土師器皿・高杯・椀2点、SX21の整地土から同Ⅲの土師器高杯2個体・同Ⅱ～Ⅲの須恵器杯B・ⅢないしⅣの土師器皿A、SE24から同Ⅳ～Ⅴの須恵器杯・壺などが出土した。その他、遺物包含層から須恵器長胴甕が出土している（図45）。

木製品では、SE24から出土した豎板組の井戸枠12枚、曲物、曲物底板、斎串2点などがある。金属製品としては、井戸曲物内から出土した鉄製刀子がある。

5 時期区分

調査区東部では、重複関係から3時期、また併存の可能性の有無を考慮すると、最低5時期の遺構の変遷がある。一方北西端では、重複関係から最低6時期の遺構の変遷がある。坪内を区画する施設としては、SA06があるのみで、他には坪を分割して利用していた痕跡は見あたらない。なお、SD26・27は、SX25とともに何らかの区画施設（築地など）に伴うものであろうが、前述のように時期的に奈良時代よりは下るものと判断される。

重複関係、併存の可能性の有無、出土遺物の年代を考慮すると、時期変遷は概ね次のように理解できる。

A期（奈良時代初期） SA06、SB10などがこの時期にあたる。坪内を分割して

利用をしていたか。その場合、SA06が坪の北端までは延びないので、最低3区画以上に分割されていたことになる。

B期（奈良時代前期） SB01とSB11などがこの時期にあたる。坪の中心部をあけて東西に10尺等間規模の建物が建てられる。ともに本調査区内では最も規模の大きいと思われる建物である。坪を細分して利用した痕跡はなく、建物の規模からみてもこの時期は一坪以上の占地を推定できよう。なお、SB11はSB14に建て替えられたと考えられる。奈良市1983年調査のSB02も同時期か。

C期（奈良時代中期） SB02、SB12・SA13などがこの時期にあたる。奈良市1983年調査のSB03も規模からみて同時期か。また奈良市1987年調査のSB03は、今回の調査のSB02と方位の触れが類似しており、同時期の可能性がある。

D期（奈良時代後期） SX21の整地が行われ、同時に四条条間北小路側溝が埋め立てられ、少なくとも十六、十五の二つの坪が一体として利用される時期で、SB04・05・15などがこの時期にあたる。奈良市1983年調査のSB04も同時期か。何時期かの建て替えがありSB16・17・18が建てられるが、基本的な構成は変わらない。また、小路側溝が再度掘削された形跡はないので、十六・十五坪を一括した土地利用は奈良時代末まで変化なかったようである。

E期（平安時代前期） 井戸SE23が存続する。遺構の特定はできないが、遺物は出土しているので、何らかの宅地利用がされていた可能性がある。

6 まとめ

遺構は調査区東部と北西端に集中する。奈良時代の初めには坪を細分して利用した時期もあったが、中期以降坪を一体として使うようになったと考えられる。坪の中央部をあけた利用形態も、一坪占地の時期のあった可能性を示唆するが、二坪以上の占地の可能性も否定はできない。さらに注目したいのは、四条条間北小路北側溝埋立の様相である。北側溝は大きく二層にしか分かれず、下層は堆積の層相、上層は埋立の層相を示し、しかもこれが十六坪内部の整地と同質の整地土によって埋め立てられている。C期からD期への移行の中で十六坪内の整備とその外側の側溝の埋立が一括して行われ、しかもこのあと再び側溝として機能し

た形跡はない。奈良時代末まで最低二坪を一体とした利用は続くのである。

これまでの調査から十坪と十五坪を一括した利用の可能性が指摘されているが、今回の成果と併せると、奈良時代後期には十・十五・十六坪の三つ以上の坪が一括して利用されるようになり、これが奈良時代末まで続くことが判明した。L字型の占地は考えにくく、奈良時代の後半を通じて九・十・十五・十六の四つの坪が一括して利用されていた可能性が極めて高いといえよう。

今回の調査によっても、左京四条二坊の東半分の八つの坪が藤原仲麻呂の田村第の故地であるという確証は得られなかった。しかし、この地域の宅地利用について新たな知見を加えることができ、十五坪の大規模礎石建物が奈良時代末まで存続するのに対応して、4坪以上の占地が奈良時代末まで続く可能性が高くなった。小規模な建て替えを繰り返しながらも、仲麻呂の死後も基本的には継続した宅地利用が行われていることになる。

藤原仲麻呂の田村第は、仲麻呂の死後、田村旧宮（『続日本紀』宝亀6年3月己未条、同8年3月癸丑朔条）・田村後宮（『続日本紀』延暦元年11月丁酉条）と見え、さらに仲麻呂の甥の右大臣藤原是公の田村第となる（『続日本紀』延暦3年閏9月乙卯条）。これまでに明らかになった左京四条二坊九、十、十五、十六坪の利用状況は、田村第であるための条件を満たしていることになる。ここが田村第の一郭である可能性は高いと考えるが、その当否は別にしても、田村第について考える場合、その成立過程や仲麻呂の死後の利用のあり方までをも見通した検討が今後は必要になってこよう。

（渡辺晃宏）

9 市庭古墳東辺部の調査 第223-7・14次

1 223-7次調査

平城天皇楊梅陵（市庭古墳）の東の南北道路上で実施した、下水道敷設に伴う小規模な調査である。水上池南堤の延長線（平城宮北限）のすぐ南側と、その50mほど南の2箇所に、それぞれ3.6×2.8m・4.5×2.6mの調査区を設定した。

北区では、路面下の碎石の直下が、すぐ黄褐色混礫粘質土の地山となる。路面下1.4mまで重機で掘り下げたが、薄い暗黄褐色粘土の間層をはさむものの、基本的な土質に変化は認められなかった。

一方、南区では、西北隅で奈良時代の瓦や須恵器・土師器・炭を含む一辺0.5m以上・深さ0.45mの土坑を検出した。検出面はやはり碎石層の直下であるが、このベースとなっている黄灰褐色粘質土とその下の黄褐色砂質土は、比較的軟質で微量の土器片（埴輪片か）を含んでいる。確認のため路面下1.2mまで掘り下げたが、周濠埋土との徴証は得られず、一応外堤部分の積み土と判断した。

地山ないし奈良時代のベースとみられる面の標高はともに74.85mで、深掘り部分の底の標高は、北区が74.0m、南区が74.2mである。

住人からの聞き取りによれば、両調査区の間で道路西側の宅地の井戸をかつて掘削したおりに、植物遺体を含む周濠埋土が確認されているという。したがって、今回の調査区のすぐ西側には、市庭古墳の内濠がめぐると思われる。

2 223-14次調査

223-7次北区の北西約30mの位置で行った、住宅建設に伴う事前調査である。東西5.0m・南北1.5mの調査区を設定したが、表土下0.8mで硬質の黄褐色礫土の地山に達した。この地山は調査区全体に広がりを持ち、当初予想した周濠埋土は確認されなかった。地山上面の標高は75.3mである。

地山の上を覆う厚さ約20cmの暗茶褐色土からは、奈良時代から中世にかけてのかなり多量の土器片が出土しており、平城宮と同範の軒瓦をはじめとする瓦と炭化物を含む。軒瓦の内訳は、軒丸瓦が6225L・6308H、軒平瓦が6663C・6664D・

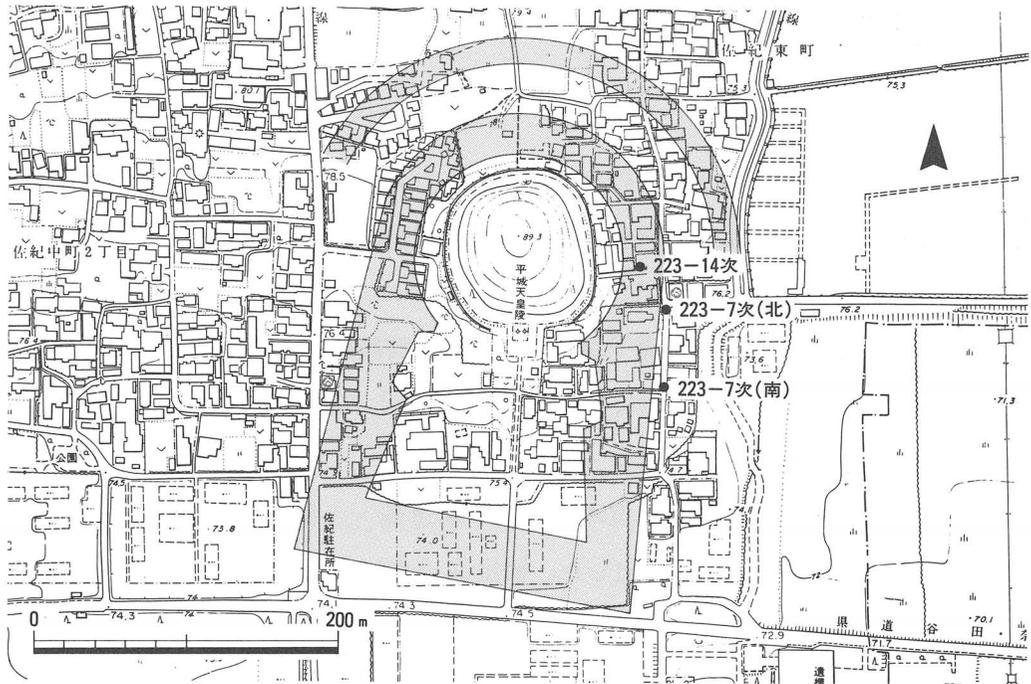


図46 第223-7・14次調査位置図 (1/5000)

6685B (いずれも各1点) であり、平城宮軒瓦編年の第Ⅱ期から第Ⅲ期に相当する。このほか、型式不明の軒丸瓦が1点出土している。

3 まとめ

今年度の2回の調査では、市庭古墳の東辺の周濠を確認できなかった。とくに周濠内と予想していた223-14次調査区において周濠が検出されなかったことは重要で、墳丘がこの部分まで広がる可能性がある。したがって、223-7次調査区が外堤部分にあたるかとなると、周濠は両者の間を通っていると考えざるをえないが、その場合は周濠の幅がかなり狭いものとなる。墳丘の北西で1980年に行った126次調査では、周濠幅が底面で29.5mであることが確認されており、それとの比較上疑問である。223-7次調査は、時間的・面積的な制約の多い中で実施したものであり、ここでの地山誤認の可能性を含めて、検討が必要であろう。いずれにしても、墳丘の東側では市庭古墳の復元の定点となる資料が不足しており、今後の調査の進展が強く望まれる。

(小沢 毅)

10 平城宮北方遺跡の調査

第223-2次

本調査は住宅の増築に伴う事前調査である。位置は平城宮西北端から約90m東の北方に当たる地点である。調査は東西約6m、南北約5mの発掘区を設定して行った。基本的な層序は上から、盛土、暗褐土、灰褐土（整地土）の順で地山に至る。調査区内の地形は東北から西南にかけて徐々に傾斜し、東北端と西南端の比高差は約40cmあり、現地表面から地山までの深さは約15～50cmである。

主な遺構としては、地山上で検出した奈良時代の東西溝S D01、暗褐土上で検出した北から南南東に続く中世の溝S D02がある。S D01は幅約1.5m、深さ0.3～0.4m。調査区の東西両端で掘り下げたが、溝内から軒平瓦6664C（I期）や、須恵器・土師器が出土した。この溝は宮西端近くで行った第215-6次で検出した北面大垣S A2300あるいはその前身の掘立柱塀S A2330から24m北に位置し、また右京北辺二坊二・三坪で行った第112-7次で検出した、東西溝S D02-A・Bを東に延長した位置にあたる。この溝の性格の解明については、今後における近辺の調査に期待したい。また埴輪片や古墳時代の高杯、9世紀代の黒色土器・風字硯、中世の火鉢・摺鉢や羽釜等が出土している。（館野和己）

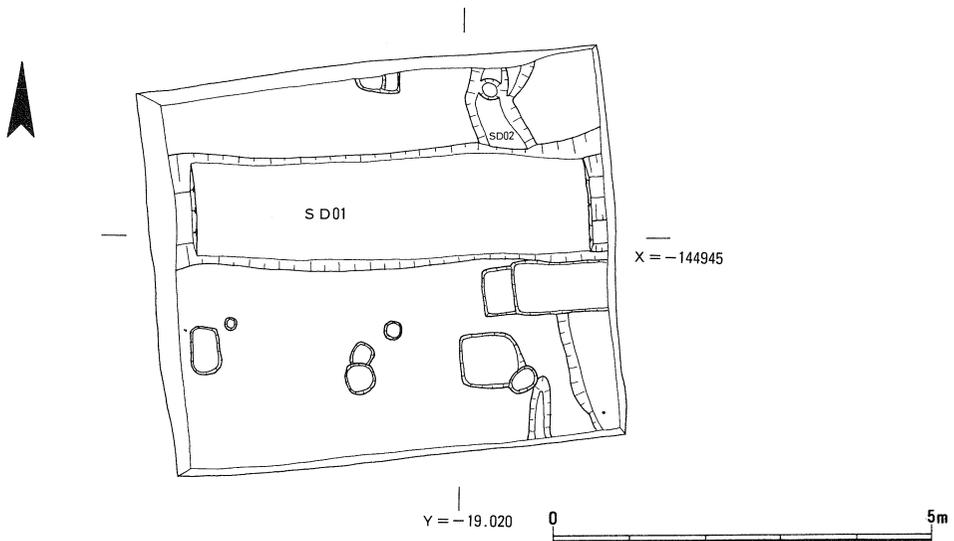


図47 第223-2次遺構図（1/100）

11 右京一条二坊八坪の調査

第223-19次

1 はじめに

本調査は、事務所ビルディングの建設に伴う事前調査として実施した。調査期間は12月9日～12月18日、調査面積は200㎡である。この地は平城京の北辺坊にあたるだけでなく、古墳時代の布留式の遺跡としても知られており、ここから東側の駐車場造成に伴う事前調査では布留式期の土壌、井戸跡等を検出している。

ところで、当該地の西、西隆寺跡との間には現在秋篠川が南流しているが、この川は中世以降、たびたび氾濫し周辺地域に被害をもたらしている。たとえば、当該地の南に接する平城開発ビルの調査では、敷地の大半が秋篠川の旧河道となっていた。従って、この調査区にも氾濫がおよんでいる可能性があり、事前に試掘調査を実施して古墳時代の包含層を確認したのち、調査に着手した。

調査区は、敷地のほぼ中央に東西20m、南北10mの発掘区を設定して行った。調査区の層序は、上から水田耕土、床土、暗褐色粘土層の順に堆積し、暗褐色粘土層の上面で遺構を検出した。

検出遺構は、土壌2、旧流路2、溝2条などがあり、秋篠川の旧流路S D05を除

きすべて古墳時代
(布留式) に属す。

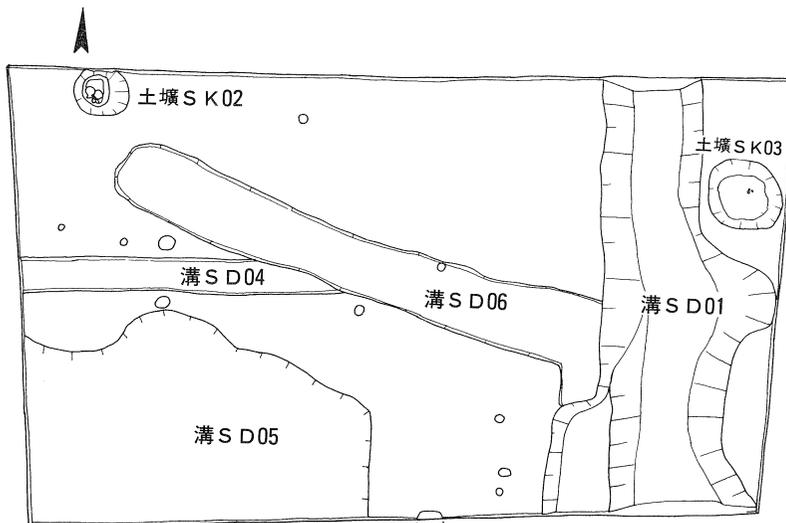


図48 第223-19次調査遺構図(1/200)

2 検出遺構

S D01 発掘区の東端で検出した古墳時代の流路。幅は2.2mから3m。深さは0.8mを測る。溝底に布留式土器の小片が少量

堆積するが、木製品などは見ない。

S K 02 布留式の土壙。発掘区西北隅で検出。直径1.5m、深さ1.2m。壙内には土器を捨てこんでおり、底面近くから壺形土器のほぼ完形品が4点ほど出土。

S K 03 S D 01を切って掘った土壙。直径2m、深さ1.3m。S K 02よりやや大きい。土器は少なく、底面近くで布留式の1個体分の壺が出土したのみ。

S D 04 東西溝。幅0.5m前後、深さ0.1m未満。約5m程度検出。布留式土器の細片がごく少量出土。

S D 05 秋篠川の旧流路。発掘区の西南隅1/3程を占める。

3 遺物

遺物は土器がある。古墳時代の布留式土器を主とし、奈良時代の須恵器・土師器が少量ある。布留式は土壙S K 04から完形を含め6個体分が出土（図49）した。いずれも短頸壺、長頸壺などの壺である。（金子裕之）

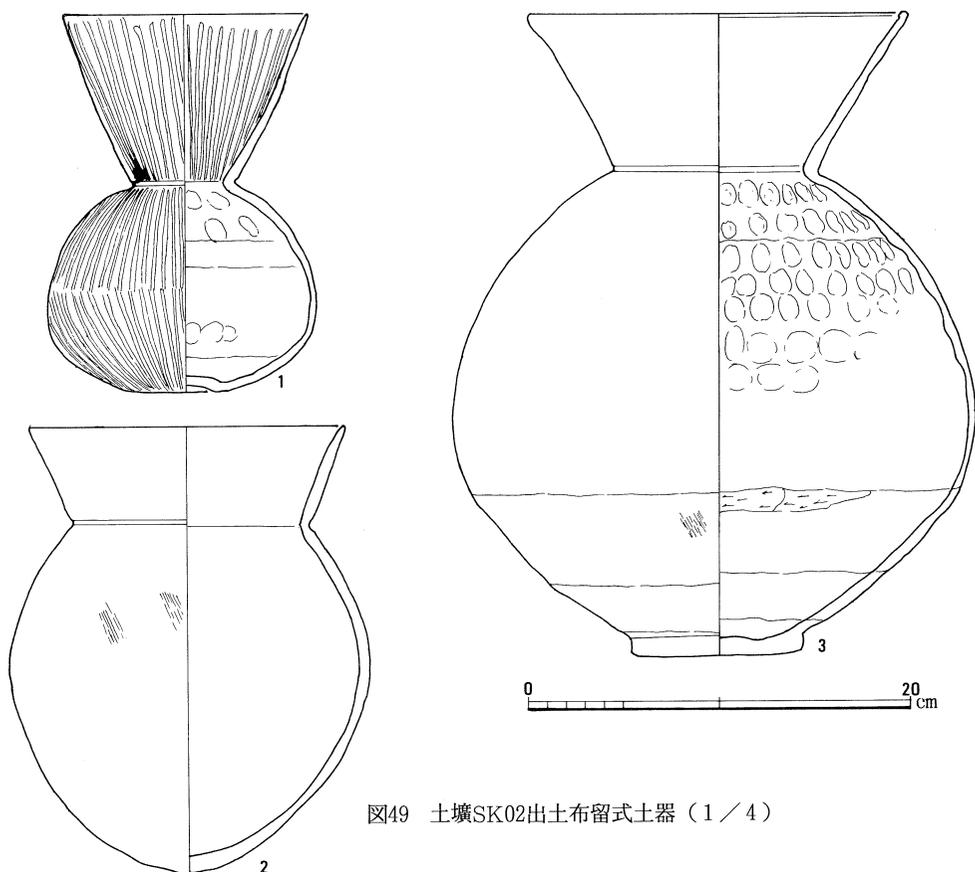


図49 土壙SK02出土布留式土器（1/4）

12 左京三条一坊七坪の調査 第231次

1 はじめに

美術館建設にともなう事前調査である。調査面積は約2800㎡、1992年1月8日に開始し、3月31日に終了した。

当該地は平城京左京三条一坊七坪に当り、南を三条々間路、東を東一坊々間路に画される。調査区は坪の中央南よりに当たる。昭和58年度に、奈良市が通称「みやと通り」をはさんだ東側で調査を行い、東一坊々間路西側溝を検出している。調査地は倉庫や工場として使用されていたため、工場の機械設置や倉庫上屋の基礎によるものと思われる攪乱が著しい。

2 遺 構

地山面上で、掘立柱建物14棟、井戸4基、土壇2基などを検出した。重複関係によって2時期に区分される。

A期 掘立柱建物SB01・05・06・08・09・11、井戸SE15・17、土壇SK19・20が属する。中心となるのは、調査区の東で検出された、南に庇をもつ建物SB08である。柱間は10尺等間で、堀形の一边は1mを越える。SB11はその西脇殿に相当し、桁行5間・梁間2間で、東に柱列が平行する。SB05とSB09は、両妻を揃えて南北に並ぶ。井戸SE15は、円形縦板組で、底中央に曲物を据える。もうひとつの井戸SE16の井戸枠はほとんど抜き取られ、かろうじて縦板1枚のみが残存する。SK19は平面不整形の浅い土壇、SK20は平面長方形の土壇で、いずれも埋土に大量の土器を含む。

B期 掘立柱建物SB02・03・04・07・10・12・13、井戸SE16・18が属する。中心となるのは、調査区の北東で検出された、南に庇をもつ建物SB03である。攪乱のため一部の柱穴を欠くが、桁行6間分を検出し、桁行7間になるものと推定される。

SB02・04・07は妻の柱筋を揃えて立ち、SB02・04はSB03の西脇殿に相当する。SE16には造りかえがある。当初(A)は平面方形で、井戸枠は縦板組である。こ

の井戸を埋め戻し、北寄りに改修する（B）。SE16Bの井戸枠はほとんど抜き取られているが、南側縦板と横板の一部が残り、A同様方形縦板組井戸であることがわかる。SE18は小形で、横板組の井戸枠を持ち、底中央に曲物2段を据える。横板の外側に縦板を立てかける。

3 遺物

SK19・20からは、奈良時代前半に属する大量の土器が出土した。SK19からは、愛知県猿投古窯産と推定される、貼花文と透かしをもつ火舎状土器が出土した。貼花文の技法は、唐三彩の影響によるものであろう。文様自体も唐の金銀器に類例を見ることができる。土壇底からは、須恵器坏B身、壺Aなどとともに大形の

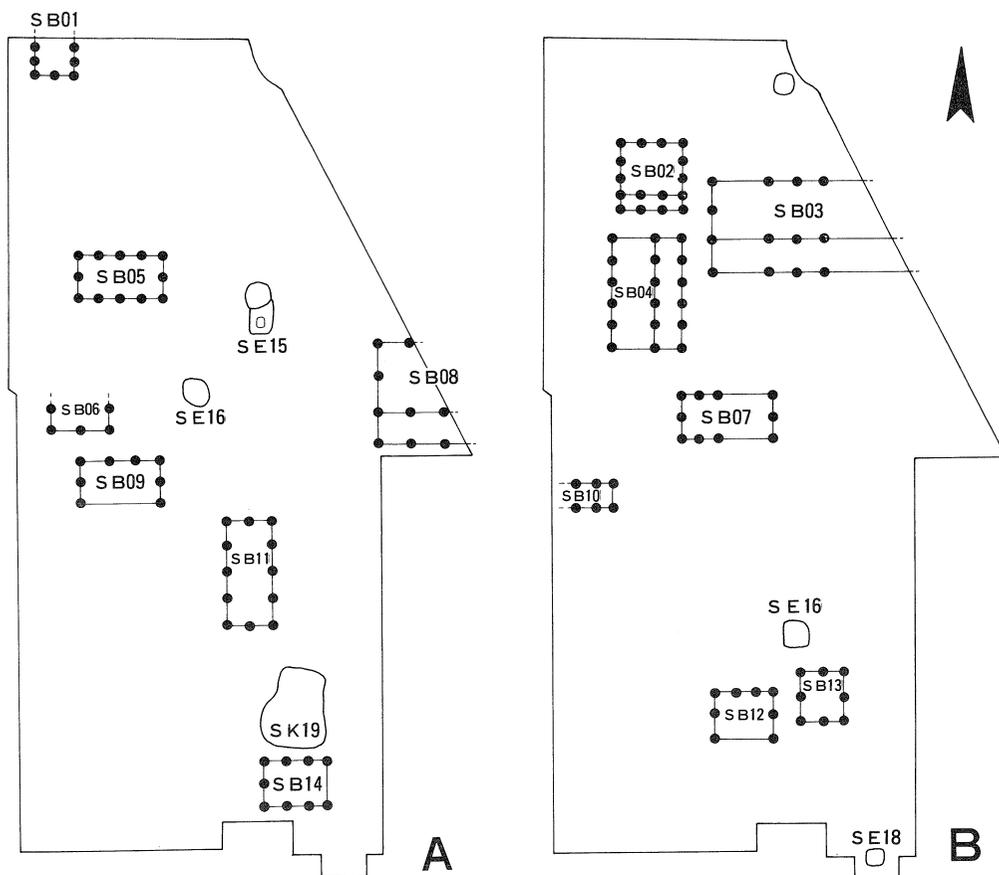


図50 遺構変遷図

須恵器甕が数個分まとまって出土した。このほか、三彩片1点、墨書土器2点（「田」・「加」）などが出土した。SK20からも須恵器坏B、壺L、甕、墨書土器（「飯」）などが出土した。SE16からは、須恵器坏Bの底部外面に「大」のヘラ書きのあるもの1点、三彩盤の破片1点などが出土した。以上土器は質的にも多彩で、注目される。

瓦は少なく、軒瓦では、軒丸瓦10点、軒平瓦3点が出土したにとどまる。

金属製品では、SK206から帯金具（丸鞆）が出土した。木製品では、SE15から曲物、SE16Aから横櫛・小壺、SE16Bから檜扇・斎串、SE18から曲物などが出土した。

4 まとめ

今回発見の遺構は、七坪の中心部にも関わらず、建物数が少なく、規模も小さい。また建て替えも頻繁ではない。周辺で発見されているような上級貴族の邸宅とするには疑問が多く、むしろ2時期のいずれもが東西棟の主殿と、南北棟の脇殿風建物で構成される点で、官衙的な機能を想定するに有利である。奈良時代のこの地の具体的な様相を直接示す史料は残されていないが、平安京では当該地に大学寮のあったことがわかっている。平城京では今回の調査区である左京三条一坊七坪・八坪に比定する説と、右京三条一坊七坪・八坪説の2説がある。いまのところ本遺構を奈良時代の大学寮とする積極的な根拠は見いだせないが、今後、大学寮の可能性を含めて当該地の性格の検討を深めて行きたい。（杉山 洋）